

巻頭言集

目次へ

岳友

豊中労山

No.417

(平成23年) 2011 Jan.

1月号

【トピック】

☛ **重要**新年会お知らせ・・・P11



“人 山を愛し、山 人をつくる”

大阪府勤労者山岳連盟

豊中勤労者山岳会

<http://homepage2.nifty.com/toyonakawac/>

目 次

登山 C班 徳下 耕一	BMP1112
山の楽しみ、山の恐怖知り！！ B班 寺田博	BMP1111
山頂にロマンスを求めて B班 土居和生	BMP1110
私の山 A班 岡田啓一	BMP1109
僕の山 C班 降籙威順	BMP1108
今何合目かな A班 藤田秀樹	BMP1106
山猿 A班 内田博	BMP1105
山で見つけたもの、 山がくれるもの A班 大井美紀	BMP1104
テント泊賛歌 C班 野村靖治	BMP1103
一期一会 B班 井之上真理子	BMP1102
初春に想う A班 佐々木紀子	BMP1101

【2010年分は「巻頭言集10」です】

登山

C班 徳下 耕一

今年は大変なスピードでたくさんさんの出来事が過ぎ去り、これまでにない経験をした。
冬山の初めての経験。
中級登山学校への参加。
キーワードは、寒い、ラッセル、雪洞、雪崩。
震える、ビレイ、クラック、落石。
まだまだ。。。
登山には学べるがたくさんあるように思う。
登山方法では夏山、冬山、春山、沢登り、岩登り、読図。。。
知識では、草花、樹木、鳥、地層、岩石、天気、救助知識。。。
歩いているだけのはずにも関わらず知ることは多い。

ここ豊中労山に入り登山というものをして気づけば3年、、まだ3年。
毎週のように山へ行き、自分の上半身が隠れるほどのザックを背負う、
部屋は登山関連の書籍が積み上げられ、地図が常備される。
登山用具は部屋の押入れの半分を占め、クライミングギアは壁にぶら下がる。
果たしてこれらは自分の身に付いているのか、、、
普通の生活が隠れるほどの登山の占める時間、経験は積み上げられ、
その意気込みは常備される。
しかし既に常に足の置き場所が無く宙ぶらりんだ。

登山の人々は個性に溢れる。
月並みな表現でいうところ、わがままで、お人好し、そして常に人と関わろうとする。
みなこれまで見たことのないほど生への執着が強い。そのように感じるのだ。

登山の捉え方は様々だが、私は思う。
世間から離れ、忘れ去られる、現実から断絶される。
麓では絵画のように風景が目に入り、頂上では幻想のような山岳の影を見る。
夢の中の様な錯覚を覚える。
ところが登山には衛生状態は欠け、それ以上に危険は既に常に付きまとっている。
体臭、トイレ、水、道迷い、滑落、落石。。。
想像するとそれはまるで悪夢のようだ。

我々は現実の行き詰まりから逃れる為、夢の世界へ逃避する。
だが夢の中で遭遇するのはさらに恐ろしい出来事。
そこで我々は文字通り夢の世界から逃れて、現実へ戻る

分かっているけど登るのだろう。そこにいなくとも。

山の楽しみ、山の恐怖を知り！！

B班 寺田 博

利尻山の夜間登山は山の楽しみを初めて感じる感動の山でした。学生時代、大好きな旅を周遊券と時刻表を持ちユースホテルに宿泊し、全国を歩き回っていました。3度目の北海道の旅は島めぐりが目的で夜行列車と船で利尻島を尋ねました。宿泊したユースホテルの受付に、懐中電灯・おにぎり・水を用意しますから御来光登山に参加しませんか呼びかけがありました。登山経験もなくまた服装の準備もないので躊躇しましたがせっかくの機会であり、挑戦することにしました。山道に何度もつまずき、寒さに震えながらの登山で、山小屋で御来光を待つ間2度と登山はしないと決心していましたが、御来光の素晴らしさ、遠くに見える大雪山の山々、海面に写された利尻山の幻の姿そして稚内とカラフトの光景は驚くばかりでした。その時初めて山はこんな楽しみと感動を与えてくる存在であることを知りました。それからしばらくは山のことを忘れていましたが、30歳頃から始めたランニングで体力が付き、職場の仲間と中央アルプスの山を登り始め、それからは次から次へと山に登り、海外の山にも出かけました。

孤独な静かな山が好きで、自由気ままな単独行に憧れ登山していましたが、初めて山の恐ろしさを経験することになりました。5月連休の最後の日に湊沢に泊まり、翌日登山者の居ないザイテングラードを歩き奥徳高岳に登り、自分一人の山を堪能し、気持ち良く歩いていましたが、岳沢の下りで何度目かのトラバースで油断をし、滑落しました。幸いにもクレパスに身体と荷物が入り助かりましたが、帽子は飛び下山する登山者もなく恐怖を覚えながら慎重に岳沢まで下山し、生きている喜びを味わいました。初めて単独行の怖さを経験し、我流で登山していたことを反省することになりました。豊中労山に加入したのは登山バスに誘われ、楽しい山行を経験し、集団登山の良さを感じたからです。今年は労山の重大事故が増えています。それも単独行の人が多く、山の安全教育と技術の習得が求められています。私は初級登山学校で多くの知識と経験を得ることが出来、また山の本を読むことにより単独行の怖さを知ることになりました。山行を計画する場合は、多くの指導と助言を求め、無理のない計画で体力と技術に見合う登山が求められています。どうか皆さん長く山を楽しみ、未知の世界(旅)に挑戦しましょう。

山頂にロマンスを求めて

B班 土居 和生

最初は軽い気持ちだった。

今から10年以上も前の話。友人から「女の子も来るから」と誘われた山でのキャンプ。当時、「趣味は？」と聞かれたら「嫁さがし」と答えていた僕は特に山に興味があった訳でもない。女の子とキャンプに興味があったのだ。

場所は伊吹山。大人になってから初めての登山だ。Tシャツとジーンズ、スニーカー、カジュアルなリュックサック。まるっきり普段のお出かけスタイルと変わらない。そんな装備で参加した。リュックの中身は財布と水筒だけだ。登山口に到着して、女の子が持ってきたテントや食料が詰まったザックと僕のリュックサックを交換することになった。重たかったが強がり言って軽いふりをしていた。坂道を登り始めると大量に汗が噴き出してきた。Tシャツとジーンズが重い。荷物も重い。なんでこんなしんどいことをしているのだと思いつつ歩いていた。だが、嫁さがしのためには仕方ないことなのだ。僕の目はギラギラしていた。

しばらく登って、友人が「後ろ振り返って見てみ」と言う。いつのまにかこんなに高く登ったのか湖北の町と琵琶湖が一望できた。いままで見たことのない素敵な景色に少し感動してしまった。よく見ると周りも緑の草原が一面に広がって気持ちのいい道だ。地面と女の子ばかり見ている周りの素晴らしい景色に気づいていなかった。ここが伊吹山の3合目だと友人が教えてくれた。このあたりからザックの重さやしんどさを感じなくなっていた。

子供の頃、僕は虫やいろんな生き物、自然が好きで祖父に良く田舎の山に連れて行ってもらっていたことを思い出していた。伊吹山にもたくさんの草花、生き物がいる。夜、テントを設営し、みんなで楽しく夕食を食べ、外を散歩した。小さな光がテントの周りを飛び交っている。ホテルだ。20年振りくらいに触ったホテルはとても小さかった。夜景も綺麗。

次の朝、山頂で日の出を見てお花畑を散歩しすっかり山の虜になってしまった。残念ながらその登山で特に恋愛事情が発生することはなかった。それ以降、山歩きをするようになった。剣山で初めてブロックン現象を見て石鎚山で道に迷い、仙丈ヶ岳で初めての高山を体験した。数年後、豊中労山のハイキングセミナーと出会い初級登山学校を経て現在に至る。軽い気持ちで始めた登山がこんなに続くとは思わなかった。今「趣味は？」と聞かれたら「嫁さがしと登山」と答えることができる。

あれ？10年以上上ってもいらない趣味がまだ残ってるやんかー！

私と山

A班 岡田 啓一

私と山との出会いはヒョンな事から始まります。子供の頃からよくスキーに行っており、社会人になってもスキーをやりたいな、と思い、「会社にスキーに連れて行ってくれるクラブがある」ということで「健脚部」というクラブに入部しました。鉢伏山やマキノへ行き、楽しいスキーシーズンも終わり、さて来年までスキーはお預けです。

ところが「さあ岡田君、山やで」同期の悪友が言いました。「山」？何それ？

「うちのクラブは表は山、裏はスキーやで」ということで、無理やり比良山に連れて行かれました。それからです、やれ靴を買え、ザックを買え、雨具を買え、だんだんペースにハマって行き、気がつけば毎月山に登っていました。よく考えればその同期の悪友は、山形大学のワンダーフォーゲル部に所属し、年間山行日数120日で留年した人で、いわゆる山屋でした(今は某大手染工場の部長ですが)1年間日帰りの山でしごかれて、24歳の時いよいよ日本アルプスデビューです。

8月のお盆の長期休暇を利用し、7泊8日のテント縦走で、白馬岳～冷池までのロングコースです。30kgぐらいのキスリングを担ぎ縦走が始まりました。1年ぐらいの山の経験で重い荷物を持って、不帰の峰をよく越えられたと思います。(無謀ですが、そのときは必死でした)結局大キレットの前で天候が悪くなり、遠見尾根を降りることになりました。

その後、みんな歳をとり40歳代前半から、(年齢の上の方も入部され)軟弱になりました。いわゆる、「健脚部」から「難脚部」へ変身です。しかし、あの素晴らしい日本アルプスの風景が忘れられず、月1回の日帰り山行と年1回だけの高山行き(小屋泊)を誓い合いました。登った高山は槍、穂高、剣など、今でも忘れられません。

豊中労山に入った今も、このペースを守っています。(月2回の時もあるかな?)

やはり、日帰り山行の延長線上に高山山行があると思います。高山もかなり行きましたが、途中でリタイア(天候不良、メンバーの体調不良)したところも多く、これからも高山を目指して、楽しい山行を続けて行きたいと思っています。

僕の山

C班 降旗 威順

僕は大阪生まれの梅田育ち。お初天神商店街の中にある曾根崎小学校（現大阪北小学校）の隣の小さな路地の産婦人科で昭和44年に生まれた。

凄く環境の良い所で生まれたため、学生時代の通学路や遊び場所は北新地、梅田地下センター、阪急東通り商店街などの大阪駅周辺のネオンと高層ビルと人混みだった。

山とは無縁な生活を送っていた。いまだに梅田の街並みと人混みが大好きな変わり者である。

そんな僕が初めて山登りをしたのが24歳の時。長野県松本に住んでいる親戚の伯父夫婦と両親に「開田村に皆で泊まりに行くから御嶽山に登ろう。」と誘われたのがきっかけだった。直ぐに石井スポーツに登山靴（当時、4万円位）を買いに行った。御嶽山の事は祖父が長野県松本出身、両親も同郷だったのでお酒を飲むと県歌「信濃の国」を歌い、二番の歌詞『四方（よも）に聳（そび）ゆる山々は 御嶽乗鞍駒ヶ岳〜』を歌っているのを聞いて知っている程度だった。

御嶽山に登るためのトレーニングは一切せずのぶっつけ本番。朝5時に女人堂から登り始めた。お盆の時期で雲ひとつない青空に恵まれ、暑さも余り感じず、行き交う人とも「こんにちは」と声をかけながら元気一杯に登って山頂に到着した。山からの景色も綺麗ではあったが、その時はまだあまり山には興味がなく、それよりも今来た道をまた降りて行かないといけないことがつらく感じた初めての山登りだった。その後12年間一度も登山靴を履く事がなく、押入れの片隅に眠ったままだった。実際の所当時は山よりも沖縄、ハワイ、タイなどの海に潜りプロダイバーを目指す青年だった。

豊中労山に入会するきっかけは2004年の新年会の時だった。両親の手伝いで和太鼓を運んでいる時に会員の方から「豊中労山もこれからは降旗君と近い年齢の子が入って来ると思う、どお、2回3回、うちの会の山行に参加してみない？」と誘われて行くうちに山登りが楽しくなり、2005年10月に入会した。2006年初級登山学校に入り、同じメンバーだった晴美（妻）と出会い2009年に結婚。2010年12月11日に長男の優志（ゆうじ）が生まれ7ヶ月が経った現在、身長71cm、体重8,3kg、歯が上下2本ずつ生えスルスルと育っている。数年後、この小さな体と足が山に向かい、一緒に山登りをしてくれる事を楽しみにしている今日この頃の親バカである。

今 何合目かな

A班 藤田 秀樹

柏原登山口から壺仙山に登った。柏原駅より1時間、1合目の標識がある。やっと、山らしい雰
囲気の中を歩くことになる。3合目くらいから次の標識が待ち遠しくなってくる。ふと、合目とは
どうして決めたのか考えてみた。

調べてみると、夜道の提灯に使う油が一合燃え尽きる道のりで区切った。米を少しづつばらまい
て一合なくなる道のりで区切った。白米一升をこぼして作った小さな山の形が、富士山に似ている
ところから、それを十等分したなど興味ある説があったが、どうも登山道口から山頂までの高さを
10等分したようである。急な坂道では短く、なだらかな道では長い「合目」になっている。昔、
山伏が酒一升かついで富士山に登り、途中で休んでは一合飲み、また休んでは一合飲みで、頂上に
着いたときに最後の一合を飲み終えたというのも私には、説得力のある説である。

したがって、その山に登るときの「疲れ具合」によって10コに分けているようにも考えられる。
これは、かつての登山が、修行や人間形成のための登山であったことを考えると、各人の最終目的
を十段階に設定し、その到達状況で、現在は何合目と決めたのではないだろうか。

合目の尺度が、物理的な距離や高さで決めるのではなく人の疲れ具合というのが、気にいった。日
本人的な発想でなんだか温かみを感じられる。おそらく、外国ではこのような合目の考え方はなか
ったのではと思われる。

私は、60歳になってからの登山を始めた。これまでに行った山には、それぞれの節目の合目があ
りそれを楽しんでいくと素晴らしい頂上が待っていた。登山のいいところは、自分にあった山をみ
つけ、挑戦し続けることが可能である。相手が、自然であるから四季によりまた天候によりいろ
ろな変化がある。同じ山に
何回行っても、また違った感動がある。

これまで会社人間でなにも考えず何も見ず、がむしゃらに歩んできた。今、自分は人生の何合目
かなとふと考える。途中なら頂上をめざし、10合目なら再度1合目からの新しい山をみつけ楽し
んでいきたい。

山猿

A班 内田 博

私は宮崎の田舎で育った山猿である。したがって子供の頃の遊びといえば木登り、川遊びなどで野原を駆け回っていた。そんな私だから山登りなんかする訳がない……。ところが中学三年の時に、田舎に滝口山と云う六甲山より少し低い山があった。二人の先生と生徒十数人で土曜日の午後から登った。枯れ木を集めて一晩中、火を焚いて過ごした強烈な思い出がある。宮崎だからアルコールと云えば芋焼酎しか知らなかった私だが、先生が持ってきたウイスキーなるものを初めて見た。実に旨そうに飲んでいる！暫くするとお前らも飲むか？と云われ、生まれて初めてウイスキーなる物を口にした。ヒュー辛いものの、その場で飛び上がった……。あれから五十年、いまでは私の生命の水源である。

そんな私が豊中労山と出会ったのは三十数年前である。確か三瓶山だったと思う。勿論山登りではない。マイクロバスの運転を頼まれて山の仲間を登山口まで案内して、私は車の中で本を読んで待っていたのです。そんな関係が長く続いていた時、名前は知っていたが「槍ヶ岳」に行こうと誘われ、しょうがないから行くかについて行った。その時は山小屋に一泊し、二日目に歩くのが嫌になり「もうここから帰る」と駄々をこねると「一人で帰す訳にはいかん。誰かをつけないとあかん」と云われ、やむなく登った槍ヶ岳の景色の素晴らしさ……。その後、百名山という山を何回も登らせて貰い、山は本当に素晴らしいと思うようになった。

そんな登山の中で、一番感動したのは荒川三山だった。今でも覚えているが、下山した時素晴らしいリーダーのもとで自分自身もよく頑張ったと涙がでてきた。その時は、仲間達って良いなあーと実感できた。

今は肥り過ぎとスポーツのやり過ぎで変形性膝関節症になり、山にも行けなくなってしまった。山の麓には出掛けて自然を満喫したいと思っているが今は仕事が面白くて仕方がない。私も前期高齢者の仲間入りをしたが、人生の先輩が沢山入居している老人ホームで働いていて良い勉強をさせて貰っている。ある程度長生きして「ピンピンころり」が夢である。

山で見つけたもの、山がくれるもの

A班 大井美紀

豊中労山に入会して、もうすぐ1年が経とうとしています。まだたったの1年ですが、振り返ってみると初級登山学校から始まり、私にとっては本格的に山と出会った大きな変化の1年でした。

労山に入るきっかけとなったのは、友人に誘われて参加したハイキングセミナーでした。私は神戸に住んでいながら、それまで六甲山には2、3度しか登ったことがなく、須磨にアルプス！？があるということも知りませんでした。こんな近くにこんないい山があったんだな、と遅まきながら新たな発見でした。その後も何度かセミナーに参加し、スタッフの方から労山の初級登山学校の話を知りました。山を通していろいろな出会いが増え、山の仲間ができればいいなと思ったのと、これからも山に登るのであれば、安全のためにも基礎的な登山の知識は持っておいたほうがいいなと思い、初級登山学校に申し込むことを決め、労山へ入会しました。

元々、私は歩くことが好きでした。数年前から車のない生活になってからは、歩くことが当然で、そう負担にも感じなくなっていました。車があれば、行動範囲も広がり確かに便利です。でもゆっくり歩くことで、車に乗って急いでいたのでは気付かない発見がたくさんあります。桜のつぼみがふくらんできたとか、屋根でひなたぼっこしているネコ気持ちよさそうとか、金木犀のいいにおい～もう秋だなあとか——たいした発見ではなくプチ発見ですが…。

山を歩いていると、それぞれの山で違ういろいろな発見があり、それもまた楽しみです。そして山からは自然のパワーをたくさんもらいます。普段は仕事などでパワーをすり減らしていますが、山へ行くと体はしんどいはずなのにすっかり充電できています。山の癒しの効果と、みんなで作って食べるごはんのおいしさにすっかりはまってしまいました。(運動不足は解消されましたが、ちっとも痩せません…)

きっとこれからもそれらを求めて山へ登ると思います。遠い夢は百名山を全て登ることでありますが…20年後、30年後もずっとゆっくり山登りを楽しめたらいいなと思っています。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

テント泊賛歌

C班 野村靖治

子供の頃一度は誰も経験することらしいが、小さい頃布団の中で天井を見ながら、自分は拾い子ではないかという思いに囚われた時期がある。そんな夜は自分の身体に羽根が生え大空を飛んでいく夢を見た。中学生になって「中学時代」という雑誌に「彷徨(さすらい)への憧れ」という下手な詩を書いて投稿し、掲載されたことがある。今から考えると、北陸の山麓の温泉地に生まれ、冬は低い雲に押しつぶされるような天候の中で育ち、余程そこから脱出したという思いがあったのだろう。

この彷徨への憧れは後年テント泊山行で実を結んだ。テントを担いで歩いていると彷徨っているような錯覚を与えてくれるのだろうか。重いザックを背にしても気持ちは明るく、ウキウキしてくる。足が遅くて、もし今日の幕営予定地に着けないほど疲れても、適当な場所にテントを張ればいいさという安心感がある。いよいよテントを張って中に入り、コンロに火をつける。今日を振り返り何となく嬉しくなる。テントの前で焚火ができれば気分は一気に華やぐ。酒を呑みながら夕餉を作る。この頃は米を炊く楽しみも覚えた。ご飯はおいしい。友も一緒なら語らいの大きな楽しみがあるが、一人もまた良しだ。テントの入り口から顔を出し満天の星を眺める。夜空を独占しているようなものだ。外が嵐でも中は静かな夜をテントは約束してくれる。たとえよく眠れなくてもそれも又良し。混雑しているときの山小屋のあの窮屈さと他人の鼾で眠れないイライラはしなくてすむ。

こんな具合にテント泊大好き人間であるが、68歳の自分に一体いつまでテントを担げるだろうか。テントといいシュラフといい、登山の装備は近年格段に軽量化してきている。選べる食糧も豊富になってきた。だから3～4泊までならまだ行けそうだ。その上この1年で分かったことは、この年齢でも筋肉は鍛えられるということだ。だから当面70歳までできそうである。それまでには北アルプス全縦走を終わらせ、南アルプス全縦走に取り掛からないと時間が無い。それだけではない。ヨーロッパアルプスの山麓をいつかテントを担いで旅ができれば、もう何も言うことはない。おおーい、誰か年を取るのを遅らせてくれーッ！！

一期一会

B 班 井之上 真理子

まだ山に興味が無かった頃、どこかの山頂で友と楽しそうにポーズをとっている若かりし頃の父の写真を見つけた。その時はちょうど訳もなく父をうっとり思っていた時期だったが、なんとなく誇らしく感じた記憶がある。

そんなこともすっかり忘れた頃、友人に誘われて始めたのが登山。そして何度目かで確か蛇谷ガ峰へ行き、その頂上でハイキングセミナーの案内をもらったのが豊中労山との出会いだった。

その時一緒に歩いていた友が入会した。私はというと、住んでいた所も遠くそれほどガッツリやりたい訳でも無かったので入会は考えずにいた。ところがそんな会員でもない私を白馬縦走に参加させてくれると言う。初めてのアルプスでしかも縦走。無知とは恐ろしいもので期待とワクワク感のみだった。始まってみると連日天気も良く見たことの無いキレイな花々や遙か遠くまで続く稜線、星で埋め尽くされた夜空、雷鳥にも出会いブロックン現象に温泉・・・とフルコースの、最高級の山行を満喫してしまった。当然今までのハイキングでは体験したことのない辛さやしんどさがあったにもかかわらず、不思議なことにそんなマイナスな記憶はあっという間に薄れ、まんまと山の虜になることとなる。三日坊主で飽きっぽい私が今でも登山を続けているのも、全てはこの山行に参加させて頂き、この時のメンバーの皆さんが山の魅力を教えてくださったのが始まり。

それから正式に入会し、初級登山学校や雪山教室でいろいろな技術などを教わった。山にはまだまだ見たことの無い世界がたくさん存在することを知る。そして何より、ここでもまた信頼できる先輩方や仲間に出会えたことでさらに豊かな山人生が始まった。

最近、定年退職し故郷へ帰った父がどこかの山頂で撮った写真をよくメールで送ってくる。父も地元で仲間を見つけ、家族を持ってから遠ざかっていた山に再び行き始めていた。子供みたいに無邪気にとても良い笑顔で写っていて、あの若い時の父の写真を思い出し改めて誇らしく思う。

今の私があるのは強く丈夫に産み育ててくれた両親のおかげ。これからもそれに感謝し、一生に一度だけのその日を大切にこれから始まる新しいことに向かって一歩ずつ前へ進もう。そこで出会う未だ見ぬ景色を楽しみに。

初春に想う

A班 佐々木 紀子

明けましておめでとうございます。

昨秋、住み慣れた箕面から豊中へ引っ越しました。頭上を飛び交う飛行機にも多少慣れ、活気のある街に寧ろ親しみを感じ始めた毎日です。振り向けば、永年親しんだ箕面の山々が、今は遠くから見守ってくれているような気がして心が和みます。

労山に入会して一年余りが経ちました。一人では到底踏み込めない神秘の森や山へと導かれ、瞬く間にその魅力の虜となりました。歩くことがこんなにも楽しく苦しく、そして難しいことであつたのかと身に染みました。

危険と背中合わせの山中に於いて、ひたすら歩くことに専念するうち、気がつけば頭の中は空っぽでした。頭の中がいつも一杯の日常から解放され、身体中の汗が流れ出た後、登山することで何かを得たいという最初の願いは影を潜め、心身ともに身軽になって、本来の自分が蘇つたような気分を味わいました。それは今までには無い得がたい体験でした。

仏教の夜明けを迎えた頃、空海は自らの足だけを頼りに諸国をくまなく歩き、修業の地を捜し求めました。未開の地に一人足を踏み入れ、渾身の力で新しい境地を拓こうとされた熱い想いが伝わって参ります。到る所に残された遺跡を辿れば、お大師様の息吹がそこそこに感じられ一緒に歩ける安心感に満たされます。その信仰はのどかな四国の風物に溶け込んでいて、又訪れたい思いに駆られます。

計り知れない恩恵を思う時、遠い昔の尊い一歩が偲ばれて、改めて自分の足許を見直すようになりました。

先輩方と共に歩き触れ合い、身を以て示して下さった数々の光景が、いつも心に浮かび感謝の念に堪えません。皆様からの温かいお心遣いを受けて、人と人との繋がり大切さを学ばせて頂いたことも、私の宝となりました。

新年にあたり、又歩きたい思いが沸々と込み上げてきます。これから先の人生を、気概を持って生きて行く為に、登山は私にとって無くてはならないものとなりました。今年であれば、都会では見掛けられないような山野の花々と、心を通わせてみたいと思っています。

本年も宜しくお願い申し上げます。